かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311

記念祭まであと一週間

さあ もう一踏ん張り

立教164年11月29日(木)午前10時 執行

その日に向け、三年千日の成人の歩みを推し進めてきた大教会創立百十周年記念祭まで余すところ一週間となりました。

大教会ではその慶びの日を迎える準備として、神殿横中庭の整備を始め、エレベーターの設置・石段の手すり設置・道路部アスファルト敷設工事等は既に為し了え、続いて草刈、木々の剪定など、連日、ひのきしんの方々の真実の伏せこみによって着々とその準備が進んでおります。

その中に、記念祭の諸係役割が発表され、去る十月二十日には各係キャップの打ち合わせが、翌日の秋季大祭後には各係での係員の打ち合わせが行なわれて、いよいよ目睫の間に迫った記念祭に向け、事務上のシフトもオーバートップに入りました。

大教会長様は、記念祭まで四十日ほどとなった秋季大祭に当たって、先般の米国同時多発テロ事件に触れられながら、立教の元一日のをやの思いを諄々と述べられ、続いて、笠岡の元一日を基に三年千日活動の縁起を再び振り返られて、残された日々の弛みなき実践を鼓舞されました（次頁に要旨掲載）。

秋季大祭後には、《おうた七・心つくしたものだね》が、記念祭後に参拝者で斉唱させていただくべく合唱練習を重ねてきたコーラス隊のリードする中に、ハーモニーも麗しく斉唱されました。

大教会では、先日来、記念祭前夜の夜警屯所となるべき車庫裏少年会倉庫の新設・神殿横中庭の臨時屋根設営・客殿池掃除・屋内壁塗装工事……と随所で、ひのきしん者・業者による作業が行なわれ、植木剪定作業の仕上げも記念祭間際まで続けられる模様です。

目に見えるひのきしん、各係による目に見えない準備、言わずもがな記念祭寸前まで行なわれるであろう三年千日活動……。

親の理を戴ける千載一遇の好機を逃す手はない。

にちにちに
心つくしたものだねを
神がたしかに
うけとっている

笠岡大教会
創立110周年

三年千日スローガン
諭達を実践し、をやの理を戴こう

本年の実践項目
一、おさづけの取り次ぎ
一、陽気ぐらし講座と百万軒にをいがけ
一、一万人のおぢばがえり

秋季大祭講話（要旨）

大教会長様

本日は、秋の大祭で、立教の元一日を記念してつとめるのがその意義ですが、その上から、「立教の元一日のをやの思い」と「元一日の思いに立ち返る」という二つの事柄についてお話ししたいと思います。

最後の教えの親の思いとは

この道は、世界一れつをたすけたいという親心によって始まりました。

親神様は、教祖を月日のやしろとなされて、ひながたを通して、どうすれば陽気ぐらしができるかをお教えくださいました。

形の上からは、かりものの御守護のありがたさ、その上の喜びに立ってのおたすけ活動、おつとめの大切さを、そして、見えるものだけではなく、むしろそれよりも大切な心の世界も教えていただきました。それは、最後（だめ）の教え、いわゆる元の理のお話です。

元の理のお話は、荒唐無稽な人間創造のお話ではなく、その中には、私たち人間が生きていく上で大切な角目が、いろいろと述べられています。

人間創造に当たっての親神様の思召は、「人間を造り、その陽気ぐらしをするのを見て、ともに楽しもうと思いつかれた。」という一言に述べられ、ここが一番肝心な部分です。ここに、最後の教えといわれる元があります。

今、問題になっているような宗教から考えれば、「神が喜ぶために人間を創ったのだから、言うこと聞かないなら滅ぼしてしまえ」ということにも繋がってしまいますが、親神様は、人間をただ創ったのでもなければ、神が楽しみたいから創ったというのでもありません。私たち人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいから人間を創られたのです。つまり、それによって、「神」という言葉の前に「親心」という心があるということを教えてくださったのではないでしょうか。

『おふでさき』の中では、最初「神」というお言葉が「月日」というお言葉になり、最終的には「をや」という言葉に変わってきました。全て、親神様のことを現わす意味は同じで、単なる神ではなく親であるということです。

根の教えの親の思いを伝えよう

私たちの信仰している親神様の御教えは、今話題のイスラム教やキリスト教とは違う別々の教えだと思われがちですが、実は、そうではありません。私たちは、このことを改めて思案しなければならない旬を迎えています。

『おふでさき』に、

いまゝでもどのよなみちもあるけれど
月日をしへん事わないぞや　十号42
月日よりたいてへなにもだん〳〵と
をしゑてきたる事であれども　十号43
これまでハからやとゆうてはびかりた
これも月日がをしへきたるで　十号45

というお言葉があります。

つまり、親神様は、この世に現われて最後の教えをお啓きくださったけれども、それまでにもいろいろな土地処でいろんな時・旬々に応じて、陽気ぐらしができるようにと、今までも教えてきたということです。

今、世界中で問題になっている宗教も、実は親神様が教えられた道で、本来、それによって世界中がたすけ合って陽気ぐらしができるはずですが、神という名で信仰して、「神のため」・「神の戦い」というような表現の中で、つい、殺し合いをしてしまっている一つの姿があります。

親神様にしてみれば、「一れつ人間が、一つの親・一れつの子供として、助け合ってくらしてほしいから、たすけ合う理として教えたのに、神という名に囚われて、肝心のたすけ合いを忘れてしまい、神という名の下に、同じ兄弟同士が殺し合いをするのは、実に情けない。神は信仰しているかも知れないが、そこに込められた親の思いが一つも分かっていないではないか。」ということになります。

これまでの教えは枝先の教えで、どれが素晴らしいとか間違っているというものではなく、元を尋ねれば、全て同じ根、親神様の教えである。肝心なのは、全ての教えの元は大いなる親心だということです。

だから、このたびは神が表へ現われて、教えていなかった親心 ―― 信仰を通して一れつ兄弟という理に目覚め、民族・国家を越えて互いたすけ合い、陽気ぐらしの世界に立て替えてほしいという思い ―― を現わしてくださったのが、この最後の教えではないしょうか。

今、神という名の下にいろいろと血生臭いことが起こっています。

実際、このたびのテロ行為に対して、思わず目を塞ぎたくなる事柄がありました。それは犠牲者が出たことだけではなく、アフガニスタンの人たちが、テロ行為の成功を喜んでいる姿でした。大人や子どもも女の人も、皆、喜んでいて、それがショックでした。

民族が違い、国が違う、宗教は違うかも知れませんが、そこで多くの犠牲者が出たことは明らかです。そこにもし、自分の子どもがいたとしたら……。そこまで考えられなかったのでしょうか。母親なら少なくとも分かると思います。どんな子であれ、可愛い我が子です。それが、もし、そこにテロが起こった中にいて、死んでしまったら、果たして喜べるのだろうか。それが喜べるという、そのことに私は驚愕しました。

一れつ兄弟が、なぜ、殺し合わなければならないのか。本当の親心が分かっていない。とても残念です。これからは、にをいがけ・おたすけをする者が、身上だすけだけに留まらず、少しでもこの親心を心に置いて、布教活動をすることが大切だと思いました。

皆さん方も、身上・事情だすけだけではなく、そこに大きな親心、一れつ兄弟という思いもお取り次ぎできるように、共々に、これから歩みたいと存じます。

これが、先ず、第一点です。

元一日を振り返り　五分からの成人を

もう一点は、「立教の元一日を記念して」ということに関わって、それぞれの信仰の元一日についてですが、一人ひとりの信仰の元一日もさることながら、笠岡に繋がるお互いは、笠岡の元一日にも思いを馳せ、その思いに立ち返ってつとめなければならないと思います。

このたびの百十周年に向けての歩みもそこに端を発しています。

百周年が済んで、今から四年前、「百十周年」のことを考えたときに、先ず思ったのは、百周年のことでした。

百周年は、祭典に合わせて記念祭の思いを込めてつとめました。形だけの記念の祭をつとめて、共々に喜びましたが、それに相応しい成人ができたかと考えてみると、残念ながらできていなかったと私は思いました。百周年からも成人の歩みを進めてきたつもりですが、まだまだ、本当に、そこまでなり切れてなかったという思いが強かったわけです。

そうしたときに、百周年には間に合わなかったので、百十周年には、何としかして「百周年」という一つの成人の姿をつとめたいと思っていたところ、元の理のお話の中の一節が心に浮かびました。

最初に産みおろされたものは、一様に五分であったが、五分五分と成人して、九十九年経って三寸になった時、皆出直してしまい、父親なるいざなぎのみことも、身を隠された。しかし、一度教えられた守護により、いざなみのみことは、更に元の子数を宿し込み、十月経って、これを産みおろされたが、このものも、五分から生れ、九十九年経って三寸五分まで成人して、皆出直した。そこで又、三度目の宿し込みをなされたが、このものも、

五分から生れ、九十九年経って四寸まで成人した。

というこの一節です。

これは、いわゆる成人の段階のお話で、これが私たち人間の成人の一つのサイクルではないか。つまり、百年経った、また百年後に、今の百年よりも大きな成人をしようとするならば、百年までの歩みをまたそのまま続けていくことよりも、もう一度白紙に戻って、また五分から生まれ五分五分と成人していく道の中に、百年後に、「最初三寸だったものが三寸五分」という一つの成人ができるのではないか。

――ここに、私たちの心の成人の段階もお述べくださっている気がしました。

ということは、「一度出直して五分から生まれ、五分五分と成人する」成人の仕方でなければ、百周年の成人の歩みにはならない。つまり（百周年ができなかったので、百十周年になったわけですから）、五分からの歩みがなければ、この百十周年の歩みにはならない。五分からの歩みにするには、どうすればいいのかと思案してみたとき、初代の会長様が残してくださった「元々道は無かった。歩いて歩いて付いた笠岡の道」というお言葉が目に飛び込んできました。

考えてみれば、初代も、よふぼくを作ろうとか別席者を作ろうという結果を求めて歩いたわけではありません。とにかく、御恩報じ、少しでも、親神様のたすけたいという思いに添いたいと思って、一生懸命、おたすけに歩かれた。歩いて歩いて歩いた道です。それが御供さんを主としたおたすけ活動、にをいがけ・おたすけだったろうと思います。そして、その真実の姿に、親神様がぼつぼつと不思議な御守護を現わしてくださって、今日の大きな笠岡の道を付けてくださった。

その姿を思案してみたときに、今までこうだったからこれからもそうだというのではなく、むしろ、もう一度、初代の思い・歩みに立ち返って、先ず歩くことから始めることが、「五分から」の歩みになるのではなかろうかと思い至りました。

諭達を実践し をやの理を戴こう

そして、最初の〝百万軒にをいがけ〟になってきましたが、それが、今から四年前でした。

このことにつきましては、ありがたいことに、最初の〝百万軒〟の年に、真柱様が替わられたときの諭達の中で「よふぼくの実動」と仰有った。笠岡の「歩こう。みんなでとにかく歩こう。歩こう。歩こう。」ということに対して、親神様が「さあ、後押ししてやるぞ」と諭達を通して仰有っていただいた気がしました。

そして、教祖の百十年祭のときに、真柱様が「言われてするのではなく言われん先から自分たちでしっかり心を定めて歩ませてもらうことが大切だ」と仰有いましたので、百十周年への三年千日を迎えるに当たって、私が三年千日の歩み方を決めるのではなく、実行委員会に任せて、そちらの思案で決めていただいたところ、「是非とも、〝百万軒〟をやりたい」ということで、結局、三年千日の中心になったのが、また〝百万軒〟でした。

今年は〝おさづけの取り次ぎ〟また〝一万人のおぢばがえり〟という形で次々としていますが、この〝百万軒〟は、「歩く」ことを基本にしたのは、結局、最終的には間違いなかったと思います。

今回の笠岡の活動に関しては、いろんな所から、「笠岡さんは素晴らしい動きをしているから、うちも真似さしてもらいたい。」、「うちも〝五十万軒〟をさしてもらおう」、「うちも直属挙げて、陽気ぐらし講座をさしてもらおう」、「うちもおさづけをしっかりやろう」……と、全教の動きの刺激になって、動きに繋がってきている姿を見せていただいて、ありがたいなと思います。

また、道友社が、日曜日ごとに、スカイパーフェクTVで放送をしておられる天理教の時間で、今月の第一日曜日には、「笠岡大教会初代の歩み」を放送してくださいました。ちょうど、今、跡を辿ろうと歩んできたその総仕上げの百十周年の一ヶ月前に、全教に向かって、笠岡の初代の歩みを放送してくれました。正しく、また、初代さんが、「さあ、頑張れ」と後押しをしてくれた気がして仕方ありません。

正直、この三年千日、この〝百万軒〟の歩みの上については、いろんなご意見を頂戴しました。「素晴らしい」という意見もあれば、反対の意見もあった。

その中で、本当にこれでよかったのだろうか、本当はもっと立派な花火を打ち上げた方が良かったのかなぁと自問自答しながら、こうやってなってくることを見てみたら、「間違いはなかった。この歩みは、正しく親が望んでくださった歩みだった。」と、今さらながらに喜んでいます。

皆様方も、この三年千日、いろんな思いがあって歩んできたものもあるかも知れませんが、皆さん方が歩んできたこの三年千日は、間違いではなかった、むしろ、親に喜んでいただけた、また、親が後押しをしてくれた歩みだったことを心に置いて、残された後一月余り、まだまだ、実動のできる道はいくらでもあろうと思いますので、しっかりと実動の上に歩みたいと思うと同時に、自信を持って百十周年記念祭を迎え、共々に、「この三年千日、よう頑張った。良かったなぁ。」と、互いに功績を褒め合える百十周年にしたいと思います。

百十周年が過ぎてからの歩みは、また、心を揃えてこれから共々につとめたいと思いますが、せっかくこの三年千日、心一つに歩んできました。その勢いをこれからまたしっかりとつとめるためにも、大きな踏み台としての記念祭があると思いますので、賑やかな記念祭にしたいと思います。

どうぞ皆さん方、ますます心一つに合わせておつとめいただきますようにお願い申し上げて、今日のお話を了えます。

〈以上要約〉

心の通ひ路

Leader's Mini-Essay

便所掃除に学ぶ会

簸ノ川分教会長　津森朋之

表統領先生より、さかんに、地域におけるひのきしんの実践という事を聞かせていただいております。

昨年夏頃より、何かできる事はないかと探しておりましたが、近くの運動公園にトイレが一ヶ所、裏の愛后山公園にトイレが二ヶ所ありますので、気が向いた時に出かけては、交互に掃除をさせていただいています。今の時季は紅葉した落葉をはき清めているといい気持ちがいたします。

先日は、平田市青年商工会議所主催の月一回の〝便所掃除に学ぶ会〟に参加させていただきました。今回の会場は子供が通う小学校のトイレで、一人が一つの便器を受け持ってヤスリやドライバーなどのさまざまな小道具を使って、それこそ見えない裏の裏側までみがきあげて、新品同様の状態にまでしていきます。掃除を終ると、掃除前の独特のアンモニア臭がすっかりなくなっています。ここまで徹底的にみがきあげる掃除もあるんだな、確かにこれは〝掃除に学ぶ会〟だなと、貴重な経験をさせてもらって喜びましたが、その反面、お道の専売特許であるひのきしんの面でも、とり残されていくのではないかと、かすかな不安感を抱いたのも事実でした。

ひのきしんを通してか、児童委員などの地区の役を仰せつかる様になりました。無事につとまるかなという不安感半分、どんな経験ができるかなという楽しみ半分の心境ですが、地域に根ざした教会目指して、進んでいけたらと思います。

大教会だより

＝教会指令＝

◎任命願

美之郷　分教会

＊前任　桑田正則

＊新任　桑田則昭

☆奉告祭　立教164年12月9日

立教164年10月26日承認

國須　分教会

＊前任　橘高キヌヨ

＊新任　橘高祐高

☆奉告祭　立教164年11月18日

立教164年10月26日承認

秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎しんで申し上げます

親神様には「人間の陽気ぐらしをするのを見てともに楽しもう」との思いから道具を寄せ守護を教え八千八度の生まれ更りを経て人間へとお育て下さったばかりでなく身上事情を通して常に陽気ぐらしへとお導き下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございます　私共は日々朝夕のおつとめを通して御礼申し上げつつその思いに少しでも応えさせて頂きたいものと「せかい一れつをたすけたい」との親心に添うべく「つとめとさづけ」そしてにをいがけを通してたすけ一条の上に勤めさせて頂いております　その中にもこの月二十六日は教祖を月日の社とお定めになり最後の御教えをお開きになられた尊い日に当たりおぢばでは秋の大祭が執り行われますので当教会でも理のお許しを戴いて只今からおつとめ奉仕者一同立教の元一日の親心に思いを一つに結び合わせて陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて秋の大祭を執り行わせて頂きます　御前には季節の御恵みに喜び心を一杯に湛えて今日の日を楽しみに寄り集いました理に繋がる道の子供達が相共にお歌に唱和し親と慕い御礼申し上げる状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて世上では神の名の下に暴挙が行われておりますが親神様にしてみれば全ての教えは陽気ぐらしへと続く為の教えであり全ての教えの元なり神名の奥は只一つ「一れつ子供かわいいの親心」であるのになぜその事がわからず兄弟同士が争うのかとはがゆい思い一杯の事と思わせて頂き　これからのたすけ一条の上に今まで以上に親心がわかって頂けるよう丹精させて頂く所存でございます　又創立百十周年記念祭にあと一ヶ月余りとなりました　真柱様の御予定も決まり準備の方も急ピッチで進めておりますが記念祭に向けての実践項目の実動がおろそかにならないようより心を引き締めて勤めさせて頂く所存でございます　加えて年頭に定めたおぢばへの心定め達成の上にも心と行いをつくしたすけ一条の上に邁進させて頂く覚悟でございます

何卒親神様には皆の親孝心一筋の真実誠の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り荒びがちなる人々の心が澄みきり一列兄弟の理に目覚め助け合ってお望み下さる陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

ふたことみこと

いよく今月29日、創立百十周年記念祭が執行されます。

三年千日と定め、種々の実践項目のお打出しがあり、それぐ、誠真実につとめて参りました。芽出度い立派な祭典が執り行われると思います。親神様は勿論として、今の私達に道をつけて頂いた初代会長様を始め、代々の会長様並びに先達の先生方にも、お喜び頂けるものと思います。

しかし、創立記念祭は、陽気ぐらし世界実現の一通過点（旬）であり、この旬に創立者である初代様始め、先達先生方の信仰の〝思い〟を再確認させて頂き、明日への道、末代への道をつける「心定め」の時ではないかと思います。

先ず、その〝思い〟を再確認する術は、今の私達には、「笠岡大教会史」に頼る事しか出来ません。大教会史を再読される事を、お勧めします。そして自分の〝思い〟を照合し、明日からの「心定め」としては如何でしょうか。

余談ですが、「笠岡大教会史」は、平易な現代文で記述され、年代順に整理されて、大変判り易いものです。しかも、所々に語り継がれた逸話や脚注付の書簡等があり、一層身近なものになっています。編纂のご苦労は、大変だったと思います。更に付け加えれば、上原繁道先生の「あとがき」結びの言葉〝故人の跡を求めず。求めた処を求めよ〟には、感銘致しました。